神保美佳のメモ★ランダム ——VOL.42

いとおしい「思い出のかけら」

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか
法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。
取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）

この原稿を書いている8月中旬、興味深いニュースが報道されています。ご存知の方も多いと思いますが、大手出版社の小学館が老朽化したビルを取り壊すことになり、記念に大勢の漫画家たちが壁などに落書きをしている、という内容です。

落書きには「オバケのQ太郎」や「サイボーグ009」など人気キャラクターが勢揃いしており、連日1000人もの見学者が訪れ、ちょっとした"観光スポット"になっているそう。残念ながら予定通りであれば、この文章が掲載される9月には取り壊しが始まっているはずですが、それほど多くの作家やファンに愛されて来た証拠であると、改めて感じるニュースであったと思います。

そういえば4年ほど前、私の実家も老朽化で取り壊すことが決定し、荷物の片付けや掃除などを手伝ったことがありました。実家は1967年に建てられ、当時築42年という年季が入った日本家屋。荷物の搬出にはもちろん家族全員が集まり、色々と懐かしい話にも花が咲きました。

私自身、25歳から一人暮らしをしているため、改めてじっくりと実家を見るのは久しぶりだったのですが、例えば風呂場に近い柱に兄弟の名前と年月日、そして身長の傷がいくつか彫ってあったり、小学生の頃旅行先で買った古いペナントが、タンスの影に隠れるように貼ってあったりするのを発見しては、胸がキュンとするのを覚えました。今では私より背が高い弟たちも、私の腰ぐらいしかない頃があって、しょっちゅう泣きべそをかいていたものです。

また、実家の窓の多くに今では作られていない「飾りガラス」がはめ込まれていたことも再発見。割って捨ててしまうのは勿体ない、ということで、何枚かを外して新聞紙でくるみました。亡くなった祖母が使っていた重箱が出て来て、今度は両親がしみじみ昔話を始めながらそれをとっておくことにしたり、結局なかなか古いものが捨てられません。

そんなこんなで、何とか空っぽになった実家はあっという間に人の手や重機で壊され、きれいな更地になりました。しかし取り壊している間も、その過程をずっとビデオで撮影したり、割れたタイル張りの風呂桶のかけらをとっておこうかと迷ったり、最後の最後まで「思い出のかけら」から目を離さないぞ！と頑張る自分に、改めて驚きました。

それは、もう100%戻らないことが分かっているからに他ならず、冒頭で書いた落書きたちも、壊れてなくなる予定だからこそ、沢山の人々の熱い思いを集めているのではないでしょうか。一言で現すなら「センチメンタル」ともいうべき感情ですが、私の家族も漫画のファンも、そうした思いがはからずも強い「一体感」を生み出したのです。考えればそんな機会はなかなかないゆえ、貴重な時を過ごせているのだ、といえるのではないでしょうか。

取り壊し中の実家で、思い出に浸る私の両親